

歴史的 建造物を残す。 土木の力、 建築の技。

この国の歴史的な財産ともいえる、伝統的な建造物と土木構造物。これらを可能な限り元の姿のまま将来に手渡していく。これも建設業の大きな使命だ。かつて、その時代の先駆的な技と資材によって建設された建造物や構造物に、現代の土木と建築が有する最先端技術をもって新たな息吹を吹き込む。それは、先人たちの意志を引き継ぐことでもある。

平成28年(2016年)熊本地震で被災した熊本城の復旧事業と、かつてない大規模な耐震補強に挑む箱根の富士屋ホテルの現場から、至宝を未来に継承する手立てを探った。

復旧の見える化で
希望と勇気を

難攻不落の城として名高い熊本城。一六〇七(慶長十二年)、名将加藤清正によって築かれた勇壮な名城である。明治期、西南戦争の直前に天守や本丸御殿、櫓が焼失したが、一九六〇(昭和三十五年)、天守閣はRC造で外観を復元、以降、櫓や門、本丸御殿なども木造で再建された。城跡は国の特別史跡に指定され、史跡内の多くの建造物が重要文化財に該当する。

茶臼山と呼ばれた丘陵から熊本市街を見下ろす天守閣は、熊本シンボルとして親しまれてきた。しかし、二〇一六年四月に発生した熊本地震の際、広範囲にわたって石垣が崩落、再建・復元建造物である大小の天守閣や、築城当時の姿を保つ宇土櫓をはじめとする重要文化財が被災した。震災直後、テレビのインタビューでその様子を語る市民の声が震えていた。その映像から熊本城が地域の象徴を超えて、市民の日常的な精神的支柱であったことが改めて伝わってきた。

熊本が激震に見舞われたあと、天守閣はうすすらと煙に覆われていたという。熊本城総合事務所の濱田清美副所長はこう話す。「天守の屋根瓦が落下し、下地の葺き土が無い上がついていんです。火災かと思った市民もいました。日々見守ってくれていたお城が傷つき、心よりどころを失い、元気が出ないという声がたくさん聞かれました」。日常的にそこに天守閣があるという当たり前の風景が一変した。隅石一本だけでかろうじて倒壊を免れた飯田丸五階櫓、石垣もろとも崩壊した北十八間櫓や東十八間櫓など、熊本城全域で、重要文化財建造物一三棟、天守閣をはじめとする再建・復元建造物二〇棟のすべてが被災。石垣は全体の三割ほどにあたる約三三、六〇〇平方メートルに崩落や膨らみなどが見受けられた。地盤も各所で陥没、地割れが発生し、被害総額は約六三四億円に上るといふ。

心を痛めた市民から、早期の復旧、再建を望む声が数多く寄せられ熊本市は震災後に再建へ向けた基本方針を定めた。これに基づき二〇一八年、七項のコンセプトを掲げた「熊

震災から立ち上がる 天下の名城

熊本城(熊本市中央区)

本城復旧基本計画」を策定。二〇年
にわたる熊本城再建プロジェクトが
動き始めている。



被災直後の天守閣 (提供:熊本市)

段階的公開と活用」がある。「傷ついた姿でもいいから、間近で熊本城を見てみたいと感じている方も多くいらつしやいます。基本計画では、二〇年にわたる復旧プロセスをすべて見ていただくことにしました。工事の見える化は計画の最重要項目の一つです」と濱田副所長は話す。熊本城では現在、建造物内部以外の史跡を巡ることができるようになって

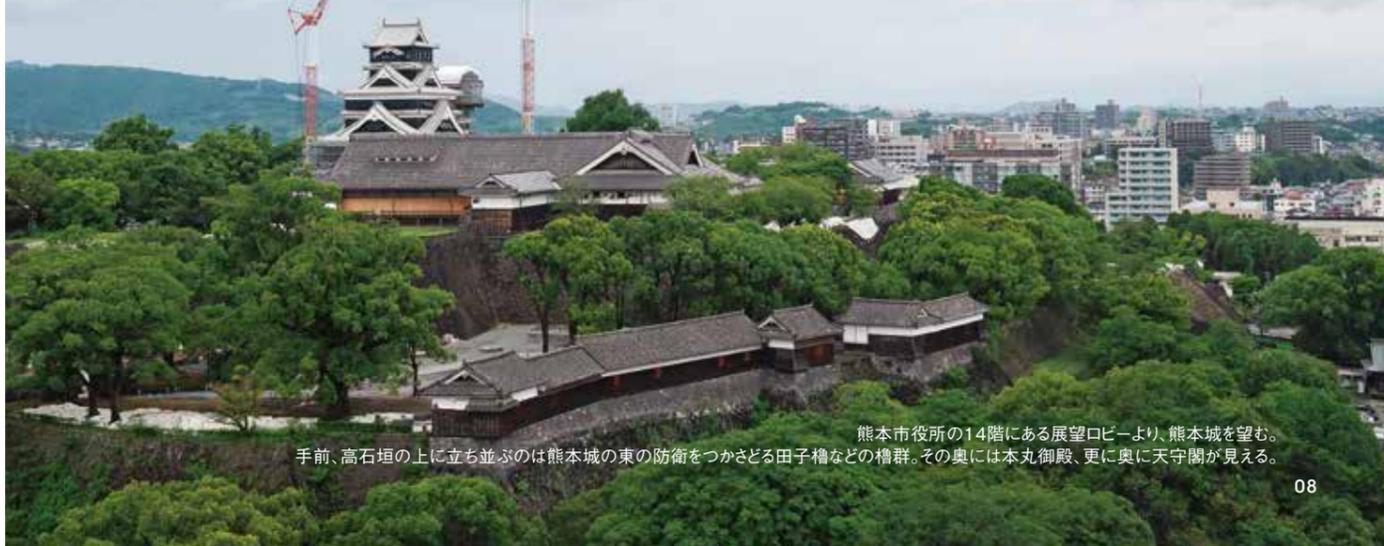


熊本市経済観光局
熊本城総合事務所
副所長 濱田 清美 Kiyomi Hamada

機や職人の姿が遠目にもよくわかる。その様子は、熊本への復興に向けた勇気を鼓舞してくれるようにも感じられた。十月からは、原則工事のない日曜・祝日限定で、二の丸広場を起点に、工用スロープなどを利用して天守閣前広場まで行ける特別公開も始まり、多くの市民、観光客が足を運んでいる。

また現在、平日も通路上からの観光が可能となる特別見学通路の整備にも着手している。行幸坂から本丸御殿を結ぶ総延長約三三〇メートル、幅約四メートル、高さが六メートルにもなる橋梁構造の見学ルートだ。石垣や建造物の様子、復旧作業の間近に見ることができるといふ。「特別史跡内にこうした施設を造ることは、通常は認め

いる。見学ルートからは、崩落した石垣や倒壊した塀など、いまだ各所に震災の傷跡が見られ胸が痛んだ。しかし、その先の天守閣の復旧現場は目の粗いネットで覆われ、稼働する重



熊本市役所の14階にある展望ロビーより、熊本城を望む。手前、高石垣の上に立ち並ぶのは熊本城の東の防衛をつかさどる田子櫓などの櫓群。その奥には本丸御殿、更に奥に天守閣が見える。



熊本城 城内図(熊本市提供資料を基に作成)



来春公開予定の特別見学通路(提供:熊本市)



特別公開時の様子(提供:熊本市)

られませんが、文化財保護の重要性を広く知っていただくために特別に設置が許可されました。二〇年にわたる仮設施設です。訪れるたびに刻々と変わっていく熊本城を見ていただけたらと思います。震災の記憶をとどめながら、再建に向けた勇気と希望を与えてくれるのではないのでしょうか」と濱田副所長は期待している。

熊本城には三つの顔がある。重要文化財を擁する貴重な史跡であること、更に市民の憩いの場である都

市公園、そして国際的な観光資源としての表情だ。史跡、文化財の復旧には学術的な視点を欠かすことができない。「石垣そのものが文化財ですから」とこまで、どうやって直すか」という検討が非常に難しい。今回、飯田丸五階櫓の崩壊した石垣から、それまで埋まっていた築城当時の石垣が出土しました。ピカピカで美しい石垣は貴重な歴史的史料です。復旧のため再び埋められることになると思いますが、その前に調査や測量、石垣の復旧工法の検討等が必要になります。情報を整理しながら事業を進めています」と濱田副所

長は説明する。

文化財である石垣は、原則的に崩落した石垣を再利用し、伝統的工法をもって震災前の姿に戻す。しかし、再び地震が起きた時に安全性を維持することができるといふ。最新の工法による補強や地震対策と、築城当時の構造、意匠との区別を明確にする可逆性を担保することも重要だ。文化財の価値保存と市民に開かれた施設の安全対策が拮抗する場面は少なくない。

更に、予算、時間といった条件も



市街地に面した長堀も復旧中。夜間はライトアップされその進捗を市民に伝える。



裏割り石内に埋設した石垣補強材を引っ張るステンレス全ネジボルト。
この後、石垣表面に高強度金網を設置して固定する。

崩れ落ちた表面の築石は、一つひとつが文化財だ。これを元の場所に戻さなければならぬ。一個ずつ番付けし、六方向から写真を撮りデータとして残した。積みなおしの作業は困難を極めた。「石のカルテを作り、パズルのように組み立てていく。崩落

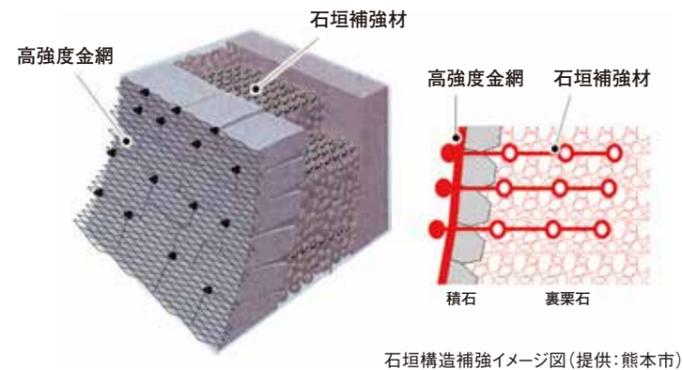
した石の一つひとつに座標を与えて、石は真上から直線的に落ちてくることが前提に、ここに落ちている石は石垣のこの部分の築石だろうなどと想定しながら復旧計画を策定しました」と黒木所長は振り返る。石垣の勾配を示す正確な測量

記録などの資料はなく、一九六〇（昭和三十五）年復元時の工事記録写真しか残っていなかった。推測による施工とはいえず、熟練の石工と一緒に精査し、新補石材（新しい石材）の交換率一〇％で復元することができたという。「修復した部分はすべて3Dデータ化しています。石の写真も貴重な資料になる。令和の時代の施工記録を後世に伝えることができます。復旧事業にあたって、精緻な記録を残すことはとても重要です」。今後、写真だけではなく、石の寸法や重量、改修の履歴などの属性まで3Dデータ化して、CIMのよ

下一階から入場して、大天守を巡るコースだったが、その小天守の穴倉と呼ばれる石垣部分が全面的に崩壊した。いわば見学コースのスタート地点が壊滅的な状態になったわけだ。復旧工事は、崩落した築石とその背面の裏割り石をすべて撤去し、改めて積みなおす作業から始まった。



株式会社大林組
熊本城土木工事事務所
所長 黒木 邦彦 *Kunihiko Kuroki*



まるよう配慮しながら、最新技術等による新たな補強方法も視野に復旧を進めていくとのことだ。

伝統工法と最新技術で
積みなおす

熊本城の被災状況は前述した通り広範囲、多岐にわたる。そのなかで先行して展開しているのが、飯田丸五階櫓の石垣と天守閣の復旧工事だ。両事業を担う(株)大林組の熊

本城土木工事事務所、黒木邦彦所長にお話を聞いた。「飯田丸五階櫓は建物の解体が終わりました。石垣の崩落箇所は今後の復旧方法の検討を待っているところです。現在、佳境を迎えているのは大小二つの天守閣の復旧工事。二〇二二年春の公開に向け施工を進めています」。取材時、小天守はまだ目の粗いネットで覆われてはいるものの、大天守は足場の解体が目前の状況だった。天守閣の見学ルートは小天守の地



上／飯田丸五階櫓の復旧工事では建物を覆うように倒壊防止受構台を架設し、下部の崩落石垣を撤去、その後、櫓を解体した。(提供: 熊本市)
下／飯田丸五階櫓の石垣からは写真上方に見える築城当時の石垣が出土した。



天守閣の復旧では、写真左側の大天守から張り出させた架構で右側の小天守の荷重を支える工法が導入されている。



大天守を石垣越しに見上げる。大天守は9月末に外観工事を完了。上部の足場が解体され、その悠然たる姿を見せた。しかし石垣と隣の小天守は復旧工事が続くため、下部には足場が残されている(上)。大天守の内部には制振ダンパーやブレース材が施された(左下)。大天守と小天守を結ぶ跳ね出し架構の施工が急ピッチで進む(右下)。

うなデータベースを構築することも可能になるかもしれないと話す。

しかし、安全性の確保という、もう一つの課題がある。「石垣の安定性は、銅石の詰め方、地形や地盤、石垣構造の均一性などの要素に大きく左右されるため数値解析では分かりません。石垣の安定性を保障す

補強材を敷き込み、石垣前面に施した高強度金網と結束、補強材と金網で地震時の裏ぐり石と石垣表面の築石の挙動を抑制するグリグリッド工法だ。「裏ぐり石は地震動によって揺らされて流動化し摩擦がなくなり沈下し、築石を内側から押し出すように飛び出たと推測されます。その裏ぐり石の動きを抑制し、背後から石垣を引っ張るように石垣を押さえるイメージです」と黒木所長は説明する。文化的な価値を維持しながら、最新の工法を導入して安全を確保するという復旧基本計画のコンセプトを実現する工法だった。石垣を積みなおす作業は、人力による手作業だ。石材だけではなく伝統的工法そのものが文化財の範疇に入るともいえる。

石工は、大阪と小豆島の協力会社を中心に、地元熊本、岡山、岐阜、長崎など、西日本のプロフェッショナルが10名以上招聘された。黒木所長はこう話す。「本当に石工さんには感謝しています。護岸などの一般的な施工をこなす技能者ではなく、『城郭石垣』を熟知したプロたちです。彼ら無くして石垣の復旧はでき

ませんでしたが、ところが、そうした熟練者が急速に少なくなっている。技術の伝承は今後大きな課題になってくるでしょうね」。

およそ四〇〇年の時を経て、同様の工法で石垣が再構築された。改めて裏ぐり石の密度を測定すると、江戸期以上の値が得られたという。「先人たちも隙間を開けないように細心の注意を払って石を積んでいたんでしょね」と黒木所長は感慨深げだった。調査から工法の検討、実際の施工と、とてつもない時間と労力を必要とする工事だ。江戸期の職人たちも、試行錯誤しながら積み上げては、更に隙間を埋めるために、より適した石を積みなおす。そうした作業を繰り返し返していたのだろう。「いい仕事をしようとする時間はかかるものです」と黒木所長は笑った。それでも現代土木の先端技術を駆使して二〇年という事業計画のロードマップを走り続ける。

天守閣復活へ！

市民が最も待ち望んでいるのは天守閣の復旧だ。市も最優先事項

として取り組んでいる。一九六〇(昭和三十五年)年、天守閣のRC造による復元を担ったのは大林組だった。その実績に懸けても完璧な仕事をしなければならぬと黒木所長は力を尽くしている。大天守は八本、小天守は四本の基礎杭で支えられ、小天守の外周部の一部は石垣の上に載っている構造だった。「そこで今回は、大天守と小天守をつなぐ横方向の鉄骨とその下の基礎杭で支える構造とし、石垣は独立した構造物とした。方が一、石垣が崩壊しても小天守には影響せず、被害を最小限にとどめることができます」と黒木所長は説明する。取材時は大天守の内装が進み、架構の構築も完工間近だった。二〇二一年の春には再び市民が天守閣に上る。その時を指し、工事が急ピッチで進んでいる。

保存と安全、

安心の狭間で

熊本に住む黒木所長は、震災直後に熊本城に駆け付け、被災状況をつぶさに見て回った。見学ルートにいたるところで巨大な石が崩落、散

乱していたという。発災は史跡が閉鎖した後、夜間だったため幸いにも人的被害は免れた。しかし、これが日中で多数の観光客が訪れる時間帯だったとしたら、その被害の甚大さは想像に難くない。被災後の光景を目の当たりにしたからこそ黒木所長の「安全確保」に対する意識は高い。やはり、文化財の保存と安全確保の狭間で懊悩することは少なくないと話す。「お客様が直接場内に入って間近に見て、触れることが理想だと思えます。だから安全は最優先。これからは、文化財の本質

的な価値を毀損しないということを考えながら、現代的な工法を取り入れていくことが求められている。文化財関係者との合意を取りながら、場所ごとに最適な復旧方法を提案していくことが肝心だと思います」。

文化財としての価値保存と、観光資源と安全確保を両輪として熊本のシンボルが日々再生に向け歩を進めている。



天守閣前広場から、復旧工事中の天守閣を望む。

文化財ホテル 耐震プロジェクト

富士屋ホテル（箱根町宮ノ下）

箱根・宮ノ下の
シンボルを再生

外国人宿泊客をターゲットとしたホテルとして一八七八（明治十一年、神奈川県箱根・宮ノ下に開業した富士屋ホテル。外国人を対象とした意匠とサービスを備え、多くの著名人から愛されるホテルとして一世を風靡し、現在までに日本を代表

するクラシックホテルとしてその地位を不動のものとしてきた。

登録有形文化財でもある富士屋ホテルが、二〇二八年四月より耐震補強、設備更新、客室の改装や改修、新築工事を行っている。富士屋ホテル（株）の専務取締役経緯を伺った。「当館の改修計画については一〇年ほど前から検討が始まっていました。着工の時期や工期などの

検討を続けるなか、二〇一三（平成二十五）年に耐震改修促進法が改正されたことに伴い耐震診断を実施したところ、基準を下回る数値であることが明らかになりました。そこで、お客様や従業員の安心、安全を最優先とするプロジェクトとして改修工事がスタートしました。着工年が創業一四〇年だったこともあり周年事業の柱と位置付けられています」。

対象となるのは一八九一（明治二十四）年竣工の本館をはじめ、西洋館、厨房、カスケードルーム、食堂棟、花御殿、フォレスト館。うち四棟は登録

有形文化財。最も新しいフォレスト館でもその竣工は一九六〇（昭和三十）五年だ。各施設では大雨の際には雨漏りが発生したり、給水の際には錆が混入したりするなど、運営に支障が出始めていた。「かつて総支配人として現場に立っていた私にとって、お客様にご迷惑をおかけしないことはもちろんです。ただ、従業員がお客様からお叱りをいただく状況も忍び難く、看過できない状況になっていました」と専務取締役は明かす。

建物は竣工から長い年月が経っているため、複雑に入り組むような施設の状況を正確に把握することが重要だった。同社の耐震改修工事対策室の大石泰生副室長はこう説明する。「詳細な図面が残っていないので、調査とその結果に基づいた

図面の復元から始めました。ホテルの営業を継続しながらの作業ですからそれだけで一年以上の時間をかけています」。



富士屋ホテル株式会社
専務取締役 葭田 昌一 Shoichi Yoshida

宴会場であるカスケードルームと厨房や事務所、日本閣は解体し、改めて新棟を新築する。大石副室長はこう言葉を継ぐ。「当初、新棟を建設しようという発想は二〇一七年ほどまでは俎上に上がっていませんでした。文化財ということもあって現行法のなかでは難しいところ。が同年七月に建築基準法の適用除外というスキームを採用すれば新棟建築が可能だということになり、従業員の就労環境、衛生環境の改善も視野に検討を始めたんです」。

れにより夏季には灼熱となる厨房の機能性も大幅に高まる。業務環境の改善は、お客様に対するホスピタリティの向上にも大きく寄与することになると葭田専務と大石副室長は期待を寄せている。

「THE FUJIYA」

富士屋ホテルは、その一四〇年の歴史を日本における観光事業の変遷とともに歩んできた。当初は外国人専用ホテルだったが、戦後の高度

経済成長期に、日本人からの余暇やレジャーに対するニーズの高まり、団体客から個人客へのシフトなどに伴い、施設の増設、改修等を繰り返してきた。訪れる人のニーズと要望に真摯に応える方針は今も変わらない。今回のプロジェクトではフォレスト館五階の客室一八室分を大型のスパゾーンに改修する。「当館で最も眺望のいい施設になるはず。かつて海外からのお客様は大浴場を必要としておりませんでしたから、各部屋のバスルームに温泉を引いて



リニューアル工事の始まった富士屋ホテル。写真右下の交差点が宮ノ下の交差点。

成し遂げた結果なんでしょうね」。今回の工事では、床、壁、天井の裏側にプレースタ材等の補強部材を配置する耐震補強改修を主として、火災等による安全を確保する防災改修、更に、内外装や設備機器、配線

残されていた数少ない図面と、実際の現場現況が異なるということもしばしばあった。調査期間はホテルの営業と重なる。調べられる時間は、チェックアウトから次のチェックインまでの三時間ほどだ。その限ら

多用途で、荷重が分散されるように

度は少なくなるかもしれませんが、当館のハード面を守り続けるのは営繕部だけだと言っても過言ではありません。これほどの大工事はこの先五〇年、いや一〇〇年先までないでしょう。今回の改修のプロセスを目に焼き付けて、今後の業務に最大限生かしてほしいと願っています」。

現場ではそこかしこで槌音が響く。全体としては広大な敷地だが、輻輳する建物に包囲され、施工ヤードの確保は難しそうだ。現場を取り仕切る鹿島建設(株)富士屋ホテル耐震改修工事事務所の原田卓也所長にお話を伺った。「傾斜地に展開し、いくつもの建築群が連鎖している現場です。安全と効率を考慮しながらスペースと動線を確保することはとても難しい。しかし、奥まった立地のフォレスト館などを見ると、重機類も現在とは違う半世紀以上前に、よくこれだけの急傾斜面に大規模な施設が建設できたものだと感じさせられます。多くの人力と創意工夫が成し遂げた結果なんでしょうね」。

着工は昨年四月。鹿島建設はその一年半前から現場に入った。積算や工法の検討をするための現地調査が必要だったからだ。「調査に多大な労力と時間を要したのはこの現場の特徴ともいえます。設備がどのようなにつながっているのか、更に木造ですから、そもそも建物がまっすぐ立っているのかどうかの検証、実測も必要でした。ゼロから造ったほうがやりやすいと感じることは多々ありましたが、これまでに使われてきた状況と意匠をいかに、どれだけ残せるかが大命題。今回は新築と全く次元の違う意識をもって取り組みました」と原田所長は振り返る。

発注者である富士屋ホテルの協力の下、西洋館、花御殿の二部屋の営業を停止して壁材をはがし、詳細な調査を行った。そこから現れたのは桃色の漆喰壁だった。かつてここに桃色で装飾された客室があったのだ。創業時のものは定かではないが、これも富士屋ホテルの歴史の一部であることは間違いない。発注者の意向もあり、改修する客室四部屋で、この桃色の部屋を再現することになったという。

百年前の匠の技を未来へ

実際の施工に着手した後も、歴史的な建築特有のシーンに何度となく立ち会うことになった。本館の天井をはがすと、そこには屋根を支える複雑な構造が出現した。「一八九

新築とは 次元の違う仕事

する。その想いを現実のものとする。工事は佳境を迎えている。



かつて東洋一と謳われた厨房は、高い天井には窓が設けられ自然光が降り注ぐ空間だった(左)。1920(大正9)年に建てられたカスケードルームでは当時、毎晩のように舞踏会が開かれていた(上)。(いずれも提供:富士屋ホテル株)



昭和5年頃の富士屋ホテル全景 (提供:富士屋ホテル株)

おりました。しかし、昨今、温泉ブームで日本人のお客様からは温泉施設のご要望も少なくない。そのご希望に応えられる自慢の施設になりませ」と葎田専務は話す。

大規模な改修によって生まれ変わろうとしている富士屋ホテルだが、その存在価値が変わることはない。受け継がれてきた精神とこれを体現する意匠を可能な限り残り、未来に継承する。葎田専務にプロジェクトのコンセプトを伺った。「全体を包括する思想は『THE FUJIYA』です。歴代の経営者が建てた貴重な建築群に宿る富士屋ホテルらしさを継承し続けるという信念のもと『唯一無二を未来に紡ぐ』というサブコピーも掲げました。耐震性能を備えた新しい施設で、新たな価値を提供し、お客様とともにこの地に在り続けるということがこの改修事業のコンセプトです」。

解体するカスケードルームを飾っていたスタンドグラスや、芸術作品ともいえる木彫り、海老虹梁えびにりょうなどは、磨きなおして新棟内に移設される。ソファや椅子、家具類、そして食堂の天井画も専門の工房や研究機関

きたのは営繕部だ。同館の細部まで知り尽くしたエキスパート集団は、時代ごとのニーズに敏感に反応し、施設の維持、保全を一手に担ってきた。修繕だけにとどまらず、歩道の段差解消や、動線をより明確にするためのサイン計画など、繊細な心配りは創業期から継承された精神を象徴する。あえて表に出ることを良しとせず、富士屋ホテルを陰から支えることを矜持とする営繕部に寄せる葎田専務の期待は大きい。「施設が新しくなり、彼らが活躍する頻



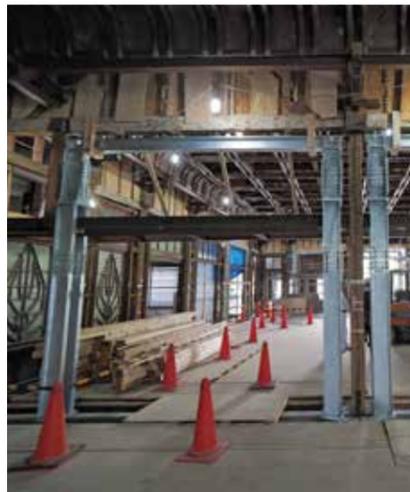
富士屋ホテル株式会社 耐震改修工事対策室 副室長 大石 泰生 Yasuo Oishi



食堂棟・メインダイニングの天井画は一時撤去され補修が行われている。



花御殿客室に施された装飾。



食堂棟・メインダイニングの壁面に鉄骨フレームを施工し、耐震性能を向上させる。木造建築を損なわないよう、鉄骨は壁内に隠蔽される。

瓦の重量を拡散させる本館の小屋裏。かつての棟梁の技が光る。



鹿島建設株式会社
富士屋ホテル耐震改修工事事務所
所長 原田 卓也 Takuya Harada

組まれていました。それが実に理にかなっている。構造設計以前に当時の棟梁の経験知と工夫の成せる技

です。すごいとしか言いようがありません」と原田所長は感嘆する。

花御殿の内装にしても、欄間の彫刻や、彫り物などで化粧された木の造作は美術品ともいえる逸品だと話す。「今の日本にこうしたものを作れる職人、技術者が果たしてどれだけ存在するのかわからないほど。完成度です。これを残し続けてきた。そして、更に引き継いでいこうという富士屋ホテルさんの想いを強く

感じます。ゼネコンはその志をカタチにする。この一点こそがこの現場における我々の使命です」。

協力会社の一つが東大阪市に本社をおく(株)鳥羽瀬社建築だ。宮大工として社寺、仏閣の中でも特に国宝や重要文化財の保存修理に数多く携わってきた。

同社は若手の育成にも力を入れている。この現場でも、数名の若手技能者がノミや金槌を操る姿が見ら

れた。「鳥羽瀬さんは二〇代の若手を積極的に育成しています。ただ、実務の要となるのはやはり熟練の

大工さんです。現況を一目見てその健全性や補強の要不要を即座に判断する、そうしたジャッジができる熟練者は絶対に必要です。しかし、高齢化は否めない。ここで頑張る若手には、最新の道具や自身の器用さだけに依存することなく、一日も早く熟練、ベテランとして頼りになる

存在になってほしいですね」と原田所長はエールを送る。

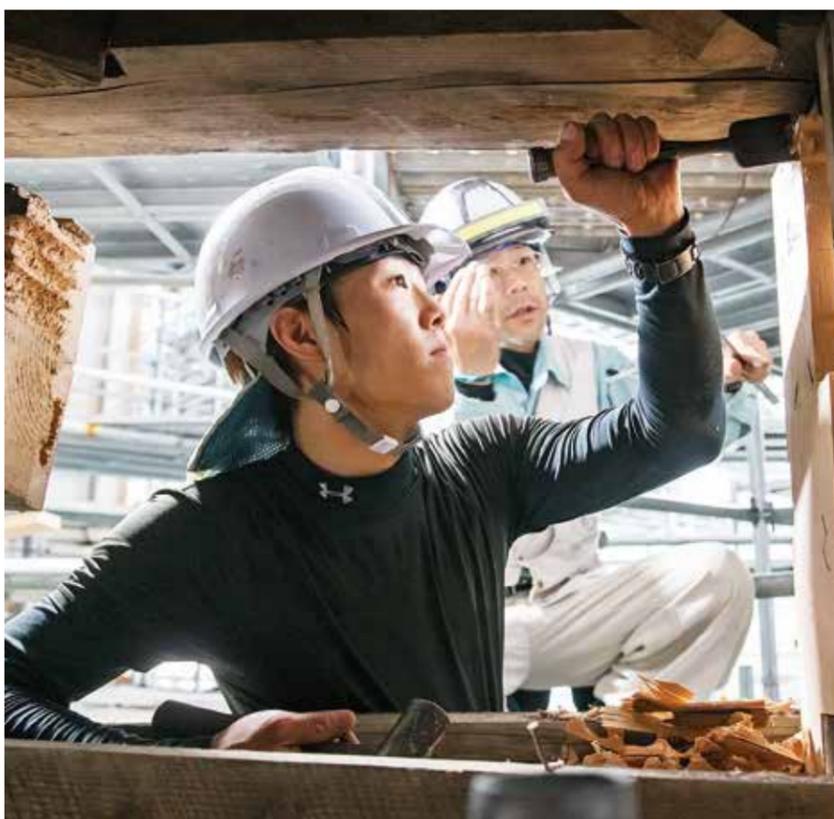
使われ続ける 登録有形文化財

富士屋ホテルの改修プロジェクトにおいて要となったのは、法令適合と歴史的価値の維持という課題をクリアすることだった。

本館や食堂棟、更には一九二〇(大正九)年に建てられたカスケードルーム、厨房、日本閣は建設時期が古く、現行法に適合していない。いずれも改修して残すのであれば、既存不適格という状態で現状をとどめることが可能だったが、一部の建築群だけを解体し、新築するとなると、もちろん現行法に適合する必要がある。「富士屋ホテルの場合は、多くの建物が連結しており、新棟を新築した場合、いまままでと同様に、本館や食堂棟と接続する必要があります。そうすると、すべての建物を現行法に適合させる必要があります。本館や食堂棟が残せないということでした。そこで、本館と食堂棟に対して、スプリンクラー設置や木造の準耐火

仕様化などの代替措置を行なって、建築基準法の適用除外申請をすることによって、新棟を接続するというプランになったんです」と原田所長は振り返る。適用除外申請は、大規模宿泊施設では全国でも前例がないため、その協議、申請に多くの時間を費やした。その甲斐もあり、歴史的価値の継承と未来への変革を同時に実現することができた。

改修プロジェクトのゴールまであと半年余り。二〇二〇年七月のリニューアルオープンに向け、リビング・ヘリテージ(生きた遺産)の工事は着々と進行中だ。「登録有形文化財でありながら『使われ続ける建物』として後世に残す。そのお手伝いができることを誇りに感じています」。原田所長は最後にそう話してくれた。



宮大工の匠の技が次世代へ向け受け継がれていく。

